朱の実　『新墾』57-1号

羽搏けぬ禽のごとしも身構へて何に怖るる後背謐けき

夕映えの絢爛そびらに鏤めて未詳の明日と云へど語らむ

群青の空に響かす大正琴音譜は野のいち面を駆けめぐる

愛の使者たらしめし雪まんじと降りうつつなく止みて鎮まる鼻炎

雪を掻き分けてひたゆく墓所つひのあくがれに似つつ眩し

霜月の茜

『新墾』57-2号

拾ひゆく骨の組立つる術もなしこのあたり乳房か平かなるも

拾ひゆく骨の熱ぎに火照る頬死者の羞恥の掛替へもあらず

暮れはやき霜月の空に漂へる雲はしばらく身を置く手懸り

総身茜に染みて立つ冬の丘すでに危ふかりし明日の予感

会はざれば別離もなきと思ふまでまこと愛しき言ひ訳の日々

卯

『新墾』57-3号

卯の一字賀状に太々記されて薄れし視力に際立ちて見ゆ

卯年ゆ忌跳ぶことの宥さるることはり賀状は規格の枠にとどまり

冬川の流れに沿ひし歩を返すその足どりの掬はれずあれ

夕映えそのくれなるをあくがれとす未来として明日を信じ得るや

レモンの酸が好き檸檬の文字が好きとこしへに愛は無を象る

寒樹々　『新墾』57-4号

きさらぎの陽に曬(さら)されながらふり零す足袋のこはぜのそのしろがね

脆くもつ虚構はやがて脱ぎ捨てむ絨椴の上の寒の足踏み

寒樹々のおし黙りゐる林のなか汝が唇のうすくれなるや

詐りの美しかりし寒夜かな頭上の煌めく星のひとつに

をとこ・をみな・斯かるあはひの謐けさや徐々に張りゆく桶の薄氷(うすらひ)

雪解水

『新墾』57-5号

つひにして冬の畢りの怒りとぞ身慄はせて過ぐる二月雷

ひとすぢのきさらぎやよひの雪解水ながれの涯なるわが詩ごころ

明日のため眠らねばならぬ一夜にてしばしばも目覚め百合の香を嗅ぐ

とほきうつつに花アザレアの返り咲く淡紅ゆゑのこの胸さわぎ

文字ひとつの行く方つきとめがたくひもじく聴くは夕暮れの鐘

春・はる

『新墾』57-6号

扉（ドア）の外すでに来てゐる春なれば閉ざされしものの静かに展く

しつかりと流れの筋も定まりて雪解の水のゆきつくところ

おろかしく朝の堕落は焦がすまじフライパンに焼くは卵ふたつ

ときめきは裡に秘めおき香ばしく空気の透明を炎に煎りたり

その涯にしづむ陽の巨きくれなゐや今日を繰り返すことなき明日

初夏の炎　『新墾』57-7号

はつ夏の韻きやさしき風の中突放の貨車の色ふき自在

焦燥をフライパンに煎るはつ夏炎となるまでを立ちつくすなれ

降りつづきただに冷めたき五月雨哭きたくてゐるをみなの位き黒子

いつばし父となりたる汝が児を高だかと宙にかざすも

花野

手毬麩は独り夕餉の椀に浮く冥土のたらちねこそわが母

あやめ・いちはつ・かきつばた　『新墾』57-8号

見誤るあやめ・いちはつ・かきつばた生きるてこその斯かるとまどひ

限りなく階を累ねてこともなげな世にわれは地上に危ふかりしか

われの死後いつ切合切葬られむ空間にあそぶはふたつ魂

ふさふなき思慕にひとつの落椿くれなゐ滲む泪垂りたり

人かつぎ荷を担ぎたる重き肩いま噛みしめてゐる貝柱

凧の行方

『新墾』57-9号

待人のとはに来らずをみなごのあはれみなづきのみづくきのあと

翳りきて欝にほかならぬ夏の空意味なきひとりのじゃんけんぽん

糸切れし凧の行方を空に追ふはかなけれどわがこころざし

わが内部ひらくと見せて展かねばひと生罪悪のごと矜持のごと

言葉あそびあそび過ぎたるつづまりに今何あらむ淋しくてならぬ

みやまをだまき　　『新墾』57-10号

眼科医の矢折をとりまきて朱夏、ひと束のみやまをだまきむらさき

蝋の火を夜を日に継ぎて灯すなり死者と生者をつなぐあかしに

門灯はほのかにともり帰り来て生者は浄めの塩をうち振る

杲々（かうかう）と晩夏の径に遅れ咲くのちの世までの向日葵の花

甦る甦らぬもの断片に追憶の種子の芽はつか出揃ふ

身の咎

『新墾』57-12号

みづみづと房なす葡萄のまむらさき海越えて来しひとつの計報

空壜をさかしまに立ておほかたの泪垂らしむ寡婦てふわれ

詫びてなほ詫び足らざりし咎の身にわれはいま跪くものが欲し

引き金のひかねばならぬ今にして既に血腥からむ・銃口

勝ち負けはつねじやんけんにあひ頒ち終生切れざりし鋏わが持つ